

《幼児教育》

自ら考えたり，工夫したりする楽しさを味わう環境構成と援助の工夫 ～友達とのかかわりや活動を通して～

那覇市立泊幼稚園教諭 安里 かな子

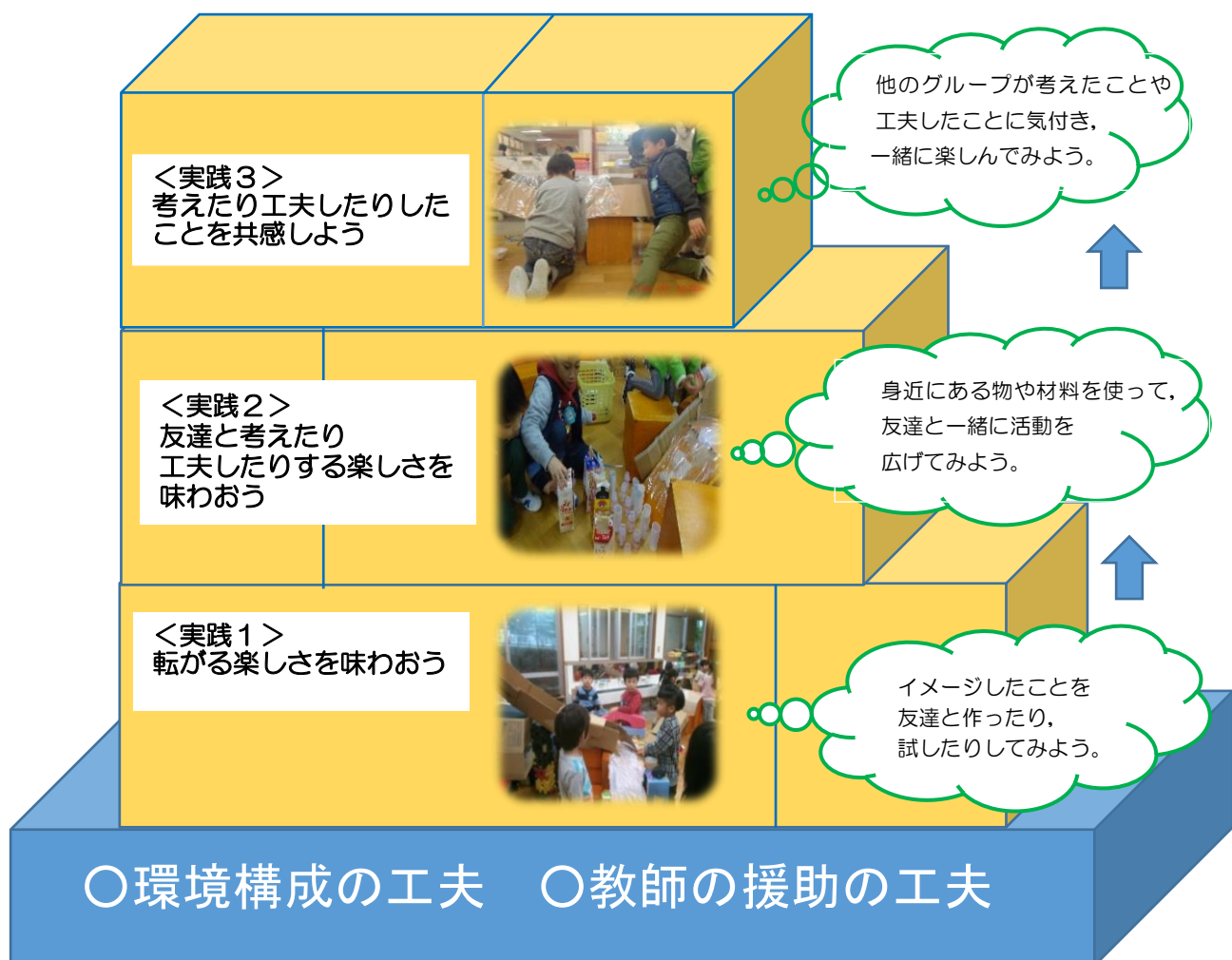
＜研究の概要＞

幼児が自ら考えたり，工夫したりする楽しさを味わうためには，気付いたり発見したりしたことを自分なりにいかしながら活動を進め，予想したことやイメージしたことを試行錯誤しながら実現できる喜びを味わうことが大切であると感じる。

本研究では，幼児の考えやイメージを友達に伝えたり，受け入れたりするような援助を工夫し，思考を働かせながら作ることができるように，身近にある道具や物を取り入れて，活動に発展や広がりを持てるように工夫した。その結果，友達とのかかわりや活動を通して，試行錯誤しながら活動を広げたり深めたりすることに繋がり，考えたり工夫したりする楽しさが味わうことができたと思う。

＜研究のイメージ＞

自ら考えたり，工夫したりする楽しさを味わう子



目 次

I	テーマ設定の理由	17
II	研究目標	17
III	研究構想図	18
IV	研究内容	18
1	「自ら考えたり工夫したりする」とは	
(1)	自ら考えたり工夫したりすることの大切さ	
(2)	自ら考えたり工夫したりするためには	
2	「自ら考えたり工夫したりする」ための工夫	
(1)	環境構成の工夫	
(2)	教師の援助の工夫	
V	保育実践	20
1	保育計画(12月下旬～1月中旬)	
2	実践1「転がる楽しさを味わおう」	
(1)	幼児の姿	
(2)	環境構成と教師の援助の工夫	
(3)	実践1の様子	
(4)	考察	
3	実践2「考えたり工夫したりする楽しさを味わおう」	
(1)	幼児の姿	
(2)	環境構成と教師の援助の工夫	
(3)	実践2の様子	
(4)	考察	
4	実践3「考えたり工夫したりした楽しさを友達と共感しよう」	
(1)	幼児の姿	
(2)	環境構成と教師の援助の工夫	
(3)	実践3の様子	
(4)	考察	
VI	成果と課題	24
1	成果	
2	課題	
	《主な参考文献》	

《幼児教育》

自ら考えたり，工夫したりする楽しさを味わうための環境構成と援助の工夫 ～友達とのかかわりや活動を通して～

那覇市立泊幼稚園教諭 安里 かな子

I テーマ設定の理由

中央教育審議会答申「幼児教育において育みたい資質・能力の整理(2016)」では、「幼児期においては、(中略)遊びや生活の中で感性を働かせてよさや美しさを感じ取ったり、不思議さに気付いたり、できるようになったことなどを使いながら、試したりいろいろな方法を工夫したりすることなどを通じて育むことが重要である。」と示されている。

しかし、近年情報化が急速に発展し、テレビゲームやインターネット等が普及する子ども達の偏った体験や遊びが懸念されている。

新幼稚園教育要領(2017.3)「環境」の内容の取り扱い(1)に「幼児が、遊びの中で周囲の環境と関わり、次第に周囲の世界に好奇心を抱き、その意味や操作の仕方に関心をもち、物事の法則性に気付き、自分なりに考えることができるようになる過程を大切にすること。また、他の幼児の考えなどに触れて新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わい、自分の考えをよりよいものにしようとする気持ちが育つようにすること。」と示されている。このことから、幼児が考えたり工夫したりするためには、身近な環境に興味や関心を持って関わり、自分なりに気付いたことや発見したことをいかして活動を進めることが大切であると考え。また、友達とのかかわりを通して自分とは違う考えに気付き、活動を広げたり深めたりする楽しさを味わう経験が重要であると捉えた。

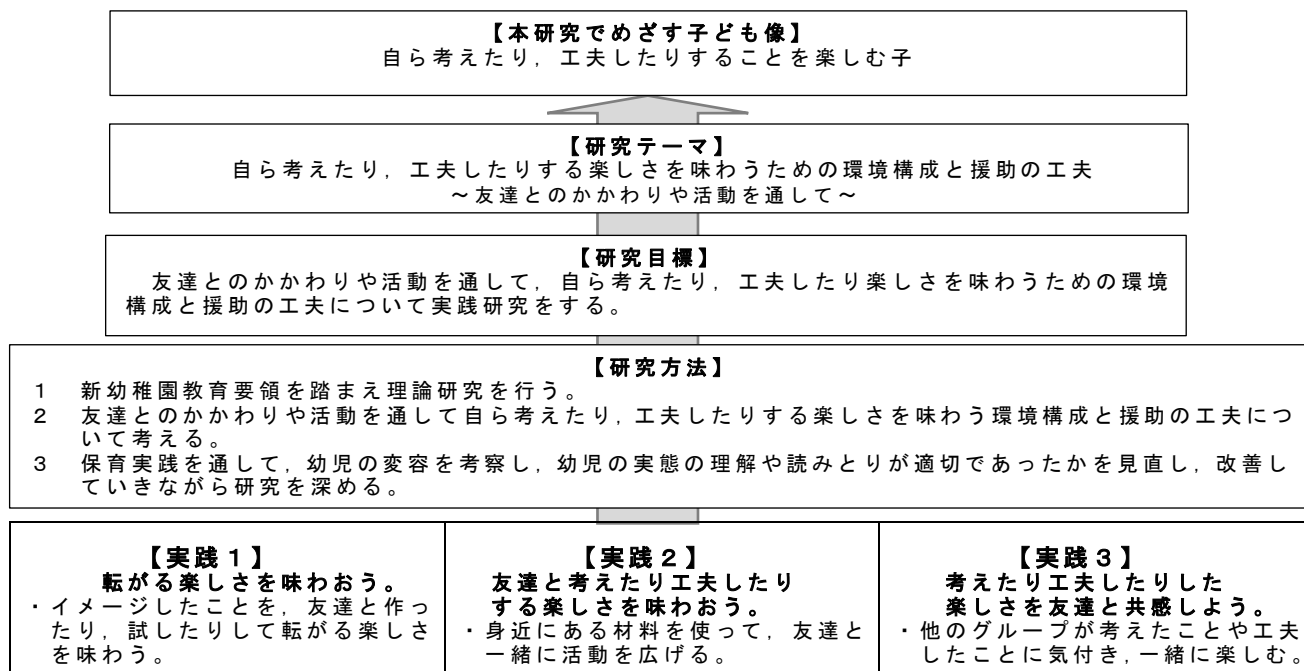
本学級の幼児は、外で体を動かしたり、ものを作ることを楽しんだり、曲に合わせて踊るなど自分らしく表現したりすることを楽しんでいるように見えた。しかし、中には次々と遊びを変えたり、気付いたり発見したりした喜びが、その場限りに終わってしまうなど、遊びや活動に継続や発展が見られないことがあった。これまでの私自身の保育を振り返ってみて、幼児の興味や関心を捉えた環境の工夫や、幼児の気付きや発見に共感しながら、じっくりと関わることでできる援助の工夫が不十分であったと感じる。

5歳児後半になると、友達関係も深まり、遊びや生活の中で考えたり、予想したり、工夫したりすることを楽しむ時期であると言われている。そこで、友達とのかかわりを通して、気付いたり発見したりしたことを共有し、友達の考えに触れながら活動が進められるような環境構成や教師の援助を工夫することで、自ら考えたり、工夫したりする楽しさを味わえるようになるのではないかと考え、本テーマを設定した。

II 研究目標

友達とのかかわりや活動を通して、自ら考えたり、工夫したりする楽しさを味わう環境構成と援助の工夫について実践研究をする。

Ⅲ 研究構想図



Ⅳ 研究内容

1 「自ら考えたり工夫したりする」とは

(1) 自ら考えたり工夫したりすることの大切さ

新幼稚園教育要領（2017.3）の幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の中に「思考力の芽生え」がある。そのことについて無藤（2017）は「なぜだろう、どうしてそうなるのだろうと、物事の仕組みに関心が向かうとき、科学する心が芽生え、あれこれ調べたり、試したりする中で物事の規則性に気づき、物事についてよく考える、という習慣が身に付いていきます。」と述べている。また、「大切なのはその答えではなく、考えたり、試したり、討論したりするプロセスにある」と記されている。

このことから、幼児期の考えたり、試したり、気付いたりしようとする多様な経験は、豊かな創造力を育み、学ぶ力や学び続ける姿勢を支える重要な要素であると捉える。そこで、本研究では、幼児が興味・関心を持った活動に着目し、考えたり、工夫したりする楽しさを味わえるような環境構成や援助を工夫し研究を進めていく。

(2) 自ら考えたり工夫したりするためには

幼児が自ら考えたり工夫したりするようになるためには、幼児が何かに気付いたり発見したりし、自らかかわりたくなるような魅力的な環境と、その環境に繰り返しかかわることが必要であると考え。幼児は「こうするとどうだろう？」「いいこと思い付いた！」など、自分なりの考えをいかそうとしたり、ひらめきや想像してわくわくしたことを実際にやってみようとする。また、友達とのかかわりの中で自分では発想しなかったことや、違う考えがあることに気づき、実際に試してみたり、新しい考えが生まれたりする。そこで自ら考えたり、工夫したりする幼児の姿を(次項:図1)にまとめてみた。それを踏まえながら、実践研究を進めていくことにする。

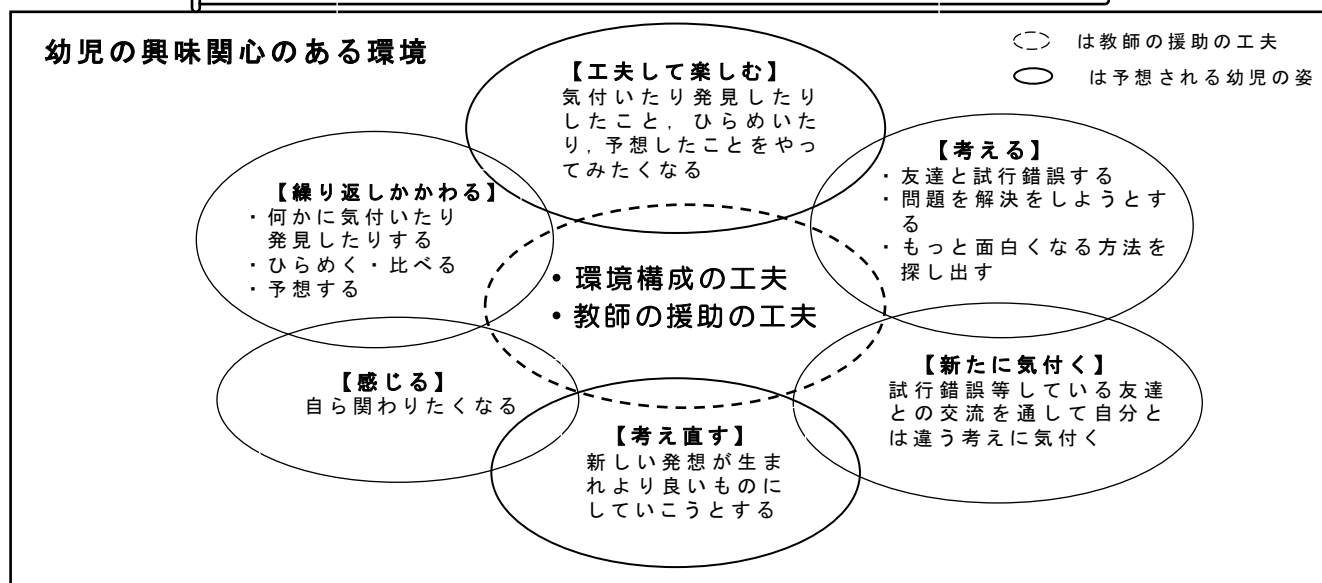


図1 自ら考えたり工夫したりするためには

2 「自ら考えたり工夫したりする」ための工夫

(1) 環境構成の工夫

12月に行われた学習発表会でおむすびころりんの劇を演じた後、舞台では表現できなかった「おにぎりを転がす」や「おにぎりを穴に落とす」ことに興味・関心を持つようになってきた幼児の姿に着目し、研究を進めていく。

柴崎(2011)は「友だちと協力して一緒に遊ぼうとする時期だとしたら、継続して活動が広げられるような場やもの、時間の確保が必要である」また、「子どもが使いこなせる道具や素材を準備することも必要」だと述べている。そこで柴崎を参考に、考えたり工夫したりするための環境構成について(表1)にまとめ実践を行った。

表1 考えたり工夫したりするための環境構成 【筆者作成】

環境構成の視点	具体的な環境構成
【環境①】場や空間	・作ったり試したりしたくなる環境 ・楽しい雰囲気のある環境
【環境②】物	・工夫してみたいような親しみのある遊具のある環境 ・様々な素材や物を選ぶことのできる環境
【環境③】時間	・じっくり取り組める十分な時間
【環境④】友達とのつながり	・考えを出し合える友達のいる環境 ・自分とは違う考えの友達がいる環境
【環境⑤】子どもが振り返りやすい環境	・活動の足跡が残されている環境 ・友達の考えに気付けるような視覚的な環境

(2) 教師の援助の工夫

本研究では学習発表会の経験から、興味・関心を捉え、考えたり工夫したりする楽しさを味わうための援助を考えていく。幼児にとってはイメージを膨らませて試行錯誤を繰り返し、思いが実現していく喜びを経験することが大切であると考え。また、気付いたり、発見したりしたことを共に喜んだり共感したりする教師の存在も欠かせない。そこで無藤(2007)の「環境」を参考に教師の援助の工夫について(次頁：表2)にまとめてみた。教師の援助の視点を研究の手立てとして友達とのかかわりを大切に、考えたり工夫したりできるような研究を進めていきたいと考える。

表 2 教師の援助の工夫 【筆者作成】

教師の援助の視点	具体的な教師の援助
<援助①> 共感し、見守る	・ 幼児の気持ちを捉え、子どもの主体的な動きを大切にする
<援助②> イメージを膨らませる	・ 幼児の思いや考えを引き出す
<援助③> 幼児の興味・関心をとらえる	・ 思いが実現できる楽しさを味わえるようにする
<援助④> 友達の考えに気付かせていく	・ 共感し、認め合い、取り入れていく
<援助⑤> 共に考える	・ 困ったときは幼児と一緒に考える ・ イメージが固定化したり、活動が停滞したときは、幼児と共に考える

V 保育実践

1 保育計画（12月下旬～1月中旬）

活動名	ねらい
<実践1> 転がる楽しさを味わおう。	○イメージしたことを友達と作ったり、試したりして転がる楽しさを味わう。
<実践2> 友達と考えたり工夫したりする楽しさを味わおう。	○身近にある材料を使って、友達と一緒に活動を広げる。
<実践3> 考えたり工夫したりした楽しさを友達と共感しよう。	○他のグループが考えたことや工夫したりしたことに気付き、一緒に楽しむ。

2 実践1「転がる楽しさを味わおう」

(1) 幼児の姿

学習発表会(劇, おむすびころりん)が終わった後, 幼児が「おにぎりを転がす」ことに興味を持ったことから, みんなでどのようにしたら転がるのかを考えさせてみた。大きな段ボールを広げ斜めにして転がしたり, 止まったり, 段ボールの強度が弱く壊れたりする様子がみられた。やがて, 「ビニールを敷くと転がりやすくなるかも・・・」「おにぎりは三角じゃなくて丸の方がいいんじゃない?」「段ボールの下に固い物をおけば壊れないんじゃないかな・・・?」等の言葉が幼児から出てきた。

(2) 環境構成と教師の援助の工夫

環境構成の工夫として, 幼児が扱いやすい大きさの段ボール板や箱, 大きなビニールを用意したり, 自分たちで試行錯誤したりしながら転がる斜面を作れるように, 高さや幅が自由に変えられる大型積み木や, 大型ブロックを幼児と一緒に準備した。

また, 幼児が考えたこと(良いアイディア)をおもしろ発見カードにかいて表示することで, 他の友達にも気付いてもらえるように工夫し, 作ったり試したりしてみたいような環境を整えた。教師の援助として, 友達とのつながりを大切に, お互いの考えや思いが引き出せるような言葉かけを意識した援助を行った。

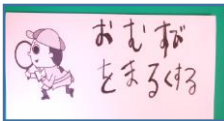
【環境⑤子どもが振り返りやすい】 ※おもしろ発見カード	【環境②物】 大型積み木、ブロック、段ボール等	【環境④友達とのつながり】
  ・考えたこと(良いアイディア)を書く ・友達の考えに視覚的に気付く	   工夫してみたくなる親しみのある物	  ・考えを出し合える友だちがいる ・自分とは違う考えの友だちがいる

図 2 環境構成の工夫

(3) 実践 1 の様子

教師の援助	○ 幼児の姿	◇ 読みとり 【図 1 より】
< 援助②イメージを広げる > < 援助⑤共に考える > 「上から転がるにはどうしたらいいかな？何か良い方法はないかな？」	A「先生見て！ここでおにぎりが止まって転がらない。」 ○方向性を変えて坂道にカーブを作ってみたが おにぎりが転がり落ちないことに気付く。 B「・・・角を丸くする！」 A「どうやって？」 B「・・・これ(段ボールのきれはし)を角においてみる。」 ○切れ端をガムテープで留めるとすぐに試している。 C「すごい！さっきよりは転がる！ だけど最後まで落ちないよ。」 ○途中で止まり、残念そうな表情をしている。 B「・・・カーブが下がっているんだよ、ほら。」 A「本当だ。下がちゃんと支えられていない。」 ○下をのぞき込んで支える積み木の高さが足りないことに気付く。 B「・・・そうだ！ちょっと待ってて。 この積み木入れよう。」 A「・・・あ、いいね！」 B「このカーブの下に入れたら、ここの方が 高くなるから転がるんじゃない？」 C「ほんとだ！今だったら転がる！！」 ○カーブを通して最後まで転がり落ちることが嬉しくて何度も繰り返している。	◇何もなかった坂道にトンネルやカーブを付けたりして友だちとの工夫やアイディアを楽しんでいるようだ。 【感じる・繰り返し関わる】 ◇上手くいかない場面では、周りの友達に相談し、一緒に問題を解決しようとしながら活動を進めていると捉える。 【工夫して楽しむ・考える】 ◇高さが足りず、ブロックを付け足したり、大型積み木の向きを変えたりして幼児なりに試行錯誤しながら工夫することに繋がった。 【考える・新たに気付く】 ◇自分だけで進めるのではなく、友達の考えも受け入れながらより良い活動にしているとする気持ちが芽生えてきた。 【考え直す】 ◇一人では解決できなかったことも友達と一緒に考えていく事で上手くできた喜びや満足感、達成感を味わう事ができた。 【考え直す・新たに気付く】
< 援助①共感し、見守る > 「よく思いついたね。すごい！」		
< 援助③幼児の興味・関心を捉える > < 援助⑤共に考える > 「よく気付いたね。どうしようか・・・？みんなで考えてみようよ。」		
< 援助④友達の考えに気付かせていく > 「なるほど！！高く上げると転がりやすくなるんだね！」		

(4) 考察

活動前におもしろ発見カードにかいた自分たちの考え(良いアイディア)を振り返ることで、実際に三角のおにぎりを丸いおにぎりに作り変えたり、斜面にビニールを貼ってみるなど、活動への興味・関心が広がってきた。さらに、ビニールを段ボールの斜面に貼る前と貼った後を比べて「本当だ～貼った方がつるつるして滑りやすい！」と気付いた幼児を見て、周りの幼児も友達の良い考えを取り入れながら、活動を進めていたことから、自分の考えをより良いものにしようとする気持ちが育ってきたと捉えた。また、斜面の段ボール板を支える大型積み木や大型ブロックを身近に用意したことは、幼児が自由に別の形のものと取り替えたり、向きを変えたり、積み重ねたりしながら全体的なバランスを考え、試行錯誤を重ねていくことに繋がったと考える。高低差を自分たちなりに考えて、上から転がり落とすことを何度も繰り返していた姿から、イメージしたことを友達と作ったり試したりして転がる楽しさを味わうことに繋がったと捉えた。

3 実践 2 「友達と考えたり工夫したりする楽しさを味わおう」

(1) 幼児の姿

実践 1 の後、トンネル、山、線路、坂道等、幼児のイメージが広がるような、絵本の読み聞かせを行った。すると、「ジェットコースター作りたい！」「階段作ってみたい！」等の声が幼児から聞こえてきた。そのため、少しずつ複雑なコース作りに挑戦する幼児が出てきた。また次第に気の合う友達と活動を進める様子や、コースに名前を付けるグループも出てきた。

(2) 環境構成と教師の援助の工夫

環境構成の工夫として、幼児が使っていたガムテープを斜面に転がしていた姿から、活動に広がりや深まりが持てるように、転がしてみたいくなるような材料や木の実等を新たに用意することにした。また、気の合う友達とコース作りを楽しんでいたことから、意図的にグループ活動を取り入れ、友達の考えを身近に触れながら活動が進められるようにした。さらに、コースの名前を看板に書いて立てることで、仲間意識や協力する姿勢が育まれるようにした。教師の援助としては、幼児が主体的に活動を進めるように見守り、新しい発見や工夫を楽しんでいる幼児に対しては周りの友達にも気付いてもらえるような場や時間、言葉かけの工夫を行った。

【環境①場や空間】 絵本コーナー コース名を立てる	【環境②物】 つつ・芯・容器 木の実	【環境④友達との つながり】グループ活動	【環境⑤振り返りやすい】 面白はっけんの時間
 作ったり、やってみたくなる	 様々な素材や物が選べる	 考えを出し合える友だちがいる	 友達の考えに視覚的に気付く

図3 環境構成の工夫

(3) 実践2の様子

教師の援助	○ 幼児の姿	◇ 読みとり 【図1より】
<援助⑤共に考える> 「どの大きさのボールを転がすのかな？」 <援助⑤共に考える> <援助②イメージを膨らませる> 「Fさんは、通ると思って いるんだよね？」 <援助⑤共に考える> <援助②イメージを膨らませる> 「Dさんはどう思う？」 <援助④友達の考えに気付かせていく> 「カップに木の実を入れて 転がすってよく思い 付いたね。好きな音の 木の実とかあるの？」 <援助②イメージを膨らませる> 「どんな音が するか、みんなに聞か せてくれる？」 <援助①共感し見守る> 「ガラガラドーンって聞 こえたの？みんなすご い！大発見だね！」	○ 斜面の下に空き容器や芯を並べ、ボウリングを楽しんでいる。<ハイパースライダーコース> D「上からボールを転がしていい？」 E「ねえちょっと待って。このままじゃあ（トンネルが）狭くて通らないよ。もっと寄せないと」 ○ 通るにはトンネルの幅が狭いと感じた幼児が両端の積み木を広げて寄せようとする。 F「いや、通るよ。崩れるから広げないで。」 E「でも、ここからよく見てごらん？これでこんな（大きな）ボールが入る？」 F「・・・。」 ○ 移動してじっくり見ている D「入らないと思う…。広げた方がいいんじゃない？」 E「そう。だから、もうちょっとここに（横に）寄せてみよう。」 ○ D児とE児と一緒に積み木の両端をボールが通るぐらいまで崩れないように少しずつ広げてたりする。 E「転がしてみるよいい？・・・ほら！通った！」 F「・・・本当だ！さっきは通らなかったかも…。じゃあ続きしよう。ピン並べるよ！」 ○ 振り返り「おもしろ発見の時間」 G「この中にどんぐりが入っているんだよ。」 G「うん、小さなどんぐり！」 G「わかった。やってみるよ。」 ○ 床に転がしたり、斜面に何度か転がしてみる。 H「今、カタカタターって聞こえたよ！」 I「今はガラガラドーンって聞こえた！」 J,K「ガラガラドーンだ！ガラガラドーン！」 ○ 幼児から笑い声が聞こえ、音の響きを楽しんでいる。	◇ トンネルの幅と転がすボール大きさを比べて、このままでは通らないことを予想する等、比べたり予想する力が育まれてきた。 【繰り返し関わる】 ◇ 自分なりにどうしたら相手に伝わるだろうと考え、見る方向等を変える等、友だちに気付かせようと、伝え方に工夫が感じられる。 【工夫して楽しむ・考える】 ◇ 自分の考えだけではなく友だちの考えに触れることで気持ちの後押しされたり、停滞していた活動が動き出した。 【新たに気付く】 ◇ カップの中の木の実の種類を変えたり数を調整したりして、振ったときの音や転がしたときの音を楽しむ等、音への関心が高まった。 【繰り返し関わる・工夫して楽しむ】 ◇ 床と斜面の違いを楽しんでいるようだ【考える】 ◇ 聞こえたことを言葉で表現し、それをクラス全員で共有することは発見する楽しさを味わうことに繋がった。 【新たに気付く・考え直す】

(4) 考察

グループ活動を取り入れたことで、自分とは違う友達の感じ方や見方に触れ、友達同士で確認し合ったり、思いや考えを伝えたりしながら活動を進めていくことに繋がったと考える。また、転がしてみたいくなるような材料や木の実等を新たに用意し

たことで、空き容器の中に木の実を入れて、床や斜面を転がした時の音の違いを楽しむ等、活動に深まりが感じられた。振り返りのおもしろ発見の時間で、その事を幼児がみんなに伝えたことで、新たな友達の考えに気づき、“音を感じて楽しむ”という発見をクラス全体で共有することもできた。

また、周りの友達に自分たちのコースの名前を知らせることは「ここはころころまわって落ちるから『ころころスライダーコース!』」など、活動の特徴を幼児自身で捉え、名前と結びつけながら考えていくことにも繋がったと思われる。

4 保育実践3「考えたり工夫したりした楽しさを友だちと共感しよう」

(1) 幼児の姿

実践2では友達と一緒に考えを出し合いながら活動を楽しんでいる幼児もいたが、反面関心が弱い幼児もいることがわかった。そこで実践3に入る前に全員が活動に興味・関心を持ち、考えたり工夫したりすることが楽しくなるような方法をみんなで考えてみることにした。すると、「コースを合体させる」「新しく作る」「作っていくうちにもっといい考えがでてくるかも」と色々な声が出てきた。

時間を十分に確保し、活動を進めていく中で、新しく考えて作ったりコースにルールを作り、さらに発展させたりするグループが出てきた。その様子を見て、「他のコースもやってみたい!」という幼児の思いが次第に強くなっていた。

(2) 環境構成と教師の援助の工夫

実践3では、自分のコース以外のコースを全員で楽しむことにした。援助の工夫として、活動の前にルールやみんなに伝えたいことがあるコースには発表の場を設定し、活動に楽しさや期待が持てるようにした。また、幼児が様々なコースに目を向け、工夫したアイディアが見つけれられるように十分な時間の確保と声かけを意識して行った。そして、幼児が思いや新たな考えを主張する場面では、お互いが共感し、認め合いながら活動が進められるような援助を心掛けた。図4の環境構成の工夫を取り入れ、実践3を行うことにした。

【環境①場や空間】 楽しい雰囲気のある環境	【環境③じっくり取り組める十分な時間】	【環境④友だちとのつながり】
 みんなに伝える ひみつきちハイパーコースの合言葉は「ひみつ」です。	  考えを出し合える友だちがいる 文字に書いて表示する楽しさ味わう	   (2階のコース)(落とし穴コース)(ヤクルトボウリング) ・自分のコースとは違う考えの友達がいる

図4 環境構成の工夫

(3) 実践3の様子

教師の援助	○幼児の姿	◇読みとり【図1より】
<援助④友達の考えに気付かせていく> 「なるほど!ここのコースは2つも使えるんだね。」 <教師の援助④友達の考えに気付かせていく> 「二階から転がすことって面白そうだね。先生も見に行ってみようっと!」	○他のコースでの活動スタート! 落とし穴コース(L児、M児、K児) N「ねえ、ここは転がすのはおもひひとつ?」 M「違うよ。一人2こずつ。だってすぐ終わるから。」 L「じゃあいくよ。あ、入った!やったあ。200てん!」 M「次いくよ!..あ、残念。一応落ちたけどカップに入らなかった。ここ500点だったのに..難しい。」 N「俺もやってみたい!」 M「二階もやっていいんだよ。二階はかごのもち全部使っていいよ。」	◇自分たちでコースのルールを聞いたり伝えたりしながら、幼児同士で活動を進められている。 【感じる】 ◇カップに点数が書かれていることで競争心や今度こそは入りたい!等コースの工夫したところやアイディアを感じながら楽しむことに繋がった。 【繰り返し関わる】

教師の援助	○ 幼児の姿	◇ 読みとり【図1より】
＜教師の援助①共感し見守る＞ 「次は倒れると良いね。」 ＜教師の援助④共感し見守る＞ 「なるほど、ピンをここに並べるという方法もあるんだね！」	やくるとぼうりんぐコース 〇児 P児 Q児 P「あのさ、もっとヤクルトのピン、前に寄せた方がいいんじゃない？」 〇「だって、遠すぎて倒すの難しい。」 P「段ボールの上に並べるっていうのは？」 Q「いいよ。やってみても。」 〇ピンを段ボールの上に並べたあと、ボールを転がしてみた 〇「ほら！やっぱりこの方がやりやすい！」 Q「本当だ！この方が倒しやすくておもしろい！」	◇イメージを膨らませ、「～するのはどうだろう」と自分で考えたことを相手に伝えながら活動が進められている。 【繰り返し関わる・工夫して楽しむ・考える】 ◇友達の思いやアイデアを受け入れて活動を進めていく姿から、考えを共有し、認め、取り入れていく活動へと繋がった。 【新たに気付く・直す】

(4) 考察

活動の前に遊びのルールなどを発表したことで、刺激を受けて他のコースでも、みんなに伝えたいことを書いて表示する等、工夫しようとする姿が見られた。また、「～するともっといいんじゃない？」等、友達とイメージや目的を共有しようとする意識も高まってきたと考えた。活動を進めていく中で、友達の思いや新たな考えを受け入れる姿が見られ、考えを共有し、認め、取り入れていく活動に繋がったと捉えた。

振り返りの時間では「落とし穴コースはボールをカップの中に落とすところが難しかったけど面白かった！」「ヤクルトのピンは本物のピンが倒れる音に似てる！」等の声が聞こえた。そのことから友達の考えたり工夫したりした楽しさを共感しながら活動を楽しむことができたと考える。初めは「おにぎりを転がす」という共通の興味関心から生まれた活動だったが、気付いたり発見したりしたことを友達とかかわりながら試行錯誤を繰り返し、様々な工夫のある活動に発展していった姿から考えたり工夫したりする楽しさを味わう活動に繋がったと考えた。

VI 成果と課題

1 成果

- (1) 幼児が友達と一緒に試行錯誤できるような環境構成の工夫や、グループ活動を取り入れたことは自分とは違う友達の良い考えを身近に感じ取り、活動を広げたり深めたりする有効な手立てとなった。
- (2) 教師が、幼児の思いや考えを引き出す言葉かけや、新しい気付きや発見に共感できるような援助を意識したことで、継続性や発展性のある活動へ結び付き、自ら考えたり工夫したりする楽しさを味わうことに繋がった。

2 課題

- (1) 友達とのかかわりを深め、さらに考えたり、工夫したりする楽しさを味わうことのできる継続的な環境構成の工夫や、個に応じた援助の工夫が必要である。
- (2) 幼児が教師の援助の下で主体性を発揮して、活動を進めていくことができるように今後も幼児理解を深め、幼児の気持ちに寄り添った環境構成や援助の工夫を考えていく必要がある。

《主な参考文献》

『幼稚園教育要領』	文部科学省	チャイルド本社	2017
『幼稚園教育要領ハンドブック』	無藤 隆	学研	2017
『保育内容 環境』	柴崎正行	ミネルヴァ書房	2009
『事例で学ぶ保育内容 領域 環境』	無藤隆・福元真由美	萌文書林	2007